

# 触法事案への対応

～相談支援専門員が知っておくべきこと～

弁護士 福島 健太

# 1 触法事案との接点

触法事案とは、そもそもどういう事案なのか？

①犯罪を犯して

→身柄を拘束されている場合

身柄拘束されていないが捜査機関から呼び出しを受けている場合

②現時点では捜査はされていないが、これまでに犯罪行為に至っている場合

# 1 触法事案との接点

触法事案とどういう流れで接するのか？

ア 自分が計画相談を担当している事案

イ 他の支援者や親族から相談を受けた事案

など

# 1 触法事案との接点

皆さんの困りごとは

- I この後どう進んでいくのかわからない  
←刑事手続きの流れ
- II どうやって弁護士へつなぐのかわからない  
←弁護士との連携方法
- III 今後、犯罪を行わないようにしたい  
←支援の仕方

## 2 弁護士との連携方法

別紙 刑事手続きの流れ 参照

### ① 当番弁護士の活用（チラシ参照）

- ・ 当番弁護士とは

弁護士が身柄拘束されている警察署へ行き本人と接見を行う制度

c f : 親族らが本人と面会できるのか

当番弁護士が被疑事実の内容や現在の状況の確認、支援者や親族等への連絡などを行う

## 2 弁護士との連携方法

- ・費用がかかるのか？

初回の接見は無料

引き続き対応してもらう場合、国選か契約することが必要

- ・どうやって利用するのか？

弁護士会へ、本人の氏名と身柄拘束されている警察署を伝える

支援者など親族以外の方でも要請可能

## 2 弁護士との連携方法

### ② 国選弁護人について

国選弁護人とは、弁護人への費用を国が負担する制度

- ・ どのようにして選任されるのか？
  - 弁護士会が裁判所からの推薦依頼に応じて名簿順に割り振る
  - c f : 専門性の担保
- ・ 全ての事件で選任されるのか？
  - 現在では全ての身柄事件に対象拡大

## 2 弁護士との連携方法

- ※ 身柄拘束されない場合もある  
→重度の障害者の場合などはすぐに釈放

直接弁護士と契約する

→費用の支払いが必要となる

c f : 大阪弁護士会による取り組み



### 3 刑事手続きの流れ

別紙「刑事手続きの流れ」参照

起訴の前後で手続きが大きく異なる

→「裁判」は起訴された後の手続き

#### ① 捜査段階について

場合によっては逮捕勾留され、捜査が行われる

その結果、起訴するか否かを検察官が決定

→起訴されないよう検察官と交渉

### 3 刑事手続きの流れ

起訴を回避する具体的な対応として

- ・ 障害の程度や支援の状況を伝える
  - ・ なぜ、今回の出来事が起きたのかを伝える
  - ・ 今回のことを契機に支援がどう変わるのか  
→直ぐに地域に戻っても落ち着いて生活できることを示す
- などを弁護士から検察官へ伝える

### 3 刑事手続きの流れ

以上のことを、限られた時間の中で行う必要あり

そこで、家族や支援者は、

- ・ 弁護人にこれまでの状況を伝える
- ・ アセスメントを実施し今後の対応を検討する  
を弁護人と連携しながら行う

※ 起訴されることを防ぐ必要が高い事案とは

### 3 刑事手続きについて

#### ② 公判段階について

- ・ 起訴された後は保釈請求が可能  
→ 保釈金と身柄引受人が必要
- ・ 裁判まで 1 ヶ月程度  
争わなければ 1 回で結審、2 週間程度で判決
- ・ 弁護人と弁護方針について協議し、地域で落ち着いた生活ができるよう環境調整する  
← すべき事は起訴前と同じ
- ・ 福祉関係者や家族に法廷で証言してもらうこともある

### 3 刑事手続きの流れ

#### ③ 判決とその後

- 有罪の判決を受ければ前科がつく  
→ 執行猶予が付いても同じ  
    c f : 執行猶予中の再犯
- 実刑判決を受けた場合  
    1ヶ月程度は拘置所にいる  
    どこの刑務所へ行くかは誰にも伝わらない
- 刑務所では十分な配慮がなされるか疑問

### 3 刑事手続きについて

#### ④ 社会復帰するまで

- ・ 社会復帰後すぐに支援が受けられるように事前に環境調整

c f : 入口支援と出口支援

- ・ 刑務所へ面会に行き、本人の意向と必要な支援を確認  
→ 弁護人は判決後立場がなくなるので対応しづらい

c f : 寄り添い弁護士制度